

農 業 に 期 待 す る

— 健康 サ イ ド か ら —

富山県農村医学研究会 越山 健二

いま農業に対する批判は厳しい。日本人の所得が世界一になったのに豊かさが実感として出てこないのは、酷税や土地の値上りによる住宅難、米価をはじめとする物価高などによるもので、そのもとは農業に深い関連があるとの指摘がある。年間五兆円に及ぶ補助金、高い食糧品を強いられる国民の負担が五兆円、計10兆円もの援助を受ける農業に対する怨念とも言えるような酷評がある。又一方手厚い保護政策が国内のみならず国際的にもやり玉にあげられ有史以来の大改造にせまられているようである。

私は農業に対して全くの素人であり批判や論評は出来ないが、こんな時こそ農業や農家、農村の果す役割について考えてみる大事な時であると思う。

私共は、かねて、健康サイドから農業、農家、農村をみてきた。敗戦のなかで食糧をはじめ、物不足、欠亡社会の中から立ち上り僅か30年余りの間に世界の先進国となり、極貧から富裕のくらしを享受する事になったのである。そんな中で私共の健康はかなり、衰弱したという認識がある。また急激に進んだ高令社会に如何に対処してゆかが百四十五兆もの財政赤字の中で国民的課題となっている。

健康は肉体面、精神面、家庭や村など社会環境面の三つの面でよりよいバランスの取れた状態を指すといわれるが、この三つの面で体質が弱まり衰弱を加速しているのである。即ち肉体面では癌や血管系の病気に加え、肥満、糖尿病、肝臓病の多発がある。人口の老令化と物の豊かさにもとづく病気である。注

目したいのは精神面と家庭をはじめ社会環境面の衰えである。生産や営農の仕組みも一変し、精神的ストレスが蓄積し人間疎外、孤独で経済優先の考えから貴重な人間性が弱まりはじめたのである。

世帯数が減少し、核家族化、共稼など家庭機能は弱まり、村は連帯感が薄れ、若年労働者の都会流出、兼業の拡大、労働力の老令化から経営規模の縮小は衆目の認める処である。かつての運命共同体としての村社会の強固な連帯感は消失したかにみえる。

私共は、いま改めて農業や農村の果す役割について考えなければならない。農業は単に食糧の生産に限らず治山、治水等の災害防止、緑や水の資源確保から、国土の保全、生態系の保護など、他の産業に期待できない役割を果している。私が特に期待したいのは情緒の涵養、伝統文化の継承であり、高令化社会に対する役割である。

農業は人間と自然との直接のふれあいであり、土を愛し、緑を育て生命を生み出す業である。今日やゝもすると農業にかゝわる人々が経済性を重視するあまりこれまで重要な役割を果してきた心の健康に対するメリットに気付かず、軽視しているように思われてならない。

農業は科学技術の発達から、もはや土や日光は不用で生命工学を利用して人工光線や水耕栽培によって多収穫が可能となり国民の食糧に不安はないという意見もあるが健康サイドからみると納得出来るものではない。

農家は変貌したとはいえ、今日なお世帯員

も多く世代家族も残っており、礼儀や感謝、報恩、忍耐、質素、勤勉などこれまで日本の経済発展の原動力となったのぞましい人間性と、それにもとづく美しい伝統的文化が残されている。

今日高令化社会が急速に進みつゝある。第一の人世を終了した人たちの中には故里への志向も高まりつゝあり、ハイテク時代の神経疲労を自然の中で癒そうと希望する者も増加してきたという。生れ育った美しい自然環境の中で寸土でもよい、野菜や草木を育て、身体をこまめに動かし、旧知との連帯を持ち、新鮮で無公害の食品を楽しみ、何等かの趣味

をもち晴耕雨読の日々は病気を予防し、孤独を和らげ高令者の楽園にもつがるのではないかと思われる。

農村の果す役割は一層の重要性を増したとも言える。老令者に限らず近代文明社会の中で衰弱しつゝある健康を、身体面、精神面、社会環境面から回復するリゾートの場であり、オアシスとして位置づけたいものである。

農業に直接関係する農民はじめ、農協や農政をあずかる方々は新しい観点から農を見直し誇りと自覚をもって対処してほしいものと念願している。